

関西シティフィルハーモニー交響楽団

第38回定期演奏会 KANSAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA
THE 38TH SUBSCRIPTION CONCERT



記念演奏会シリーズ



2004年9月26日 [日] 14:00

ザ・シンフォニーホール

主催 関西シティフィルハーモニー交響楽団

関西シティフィルハーモニー交響楽団



2004年3月27日、ザ・シンフォニーホール 第37回定期演奏会

関西シティフィルハーモニー交響楽団

KANSAI CITY PHILHARMONIC ORCHESTRA

(社)日本アマチュアオーケストラ連盟加盟団体 / 大阪文化団体連合会会員団体

1974年各大学オーケストラの卒業生を主たるメンバーとして、関西OB交響楽団の名称で結成。

1994年創団20周年を機に現在の団名に改称。

“アマチュア精神に基づく、グレードの高い社会人オーケストラ”をモットーに、年間2回の定期演奏会をはじめファミリーコンサート等を、意欲的に開催しています。

近年は指導体制の充実に力点を置き、有能なプロの先生方を指揮者や指導スタッフに招請して研鑽を積んで参りました。中でも、1998年より4年間、ズラタン・スルジッチ氏(現ザグレブ放送交響楽団芸術監督)を常任指揮者に招聘し、その指導を仰いだことにより「音楽的に大きな飛躍を遂げた」との評価を内外から得ております。

また組織としても「若い力」を積極的に運営面に活かし、“常に成長するオーケストラ”を目指して努力を重ねております。

今年8月に大阪市で開催された「全国アマチュアオーケストラフェスティバル大阪大会」では、開催主管団体として、当団の組織力を遺憾なく発揮し、フェスティバル成功の原動力として、連盟をはじめ全国のアマチュアオーケストラ各位から、高い評価と大きな賛辞を頂くことができました。

毎週土曜日の夜、指揮者やトレーナーの先生方の指導のもと、真剣な練習を行っており、現在団員数は、約100名を有します。

ごあいさつ



松田 斉

関西シティフィルハーモニー交響楽団
団長

第38回定期演奏会

2004年9月26日[日]14:00

ザ・シンフォニーホール

指揮 藏野雅彦 管弦楽 関西シティフィルハーモニー交響楽団

チャイコフスキー

イタリア奇想曲

イッポリトフ = イヴァノフ

コーカサスの風景

1. 峡谷にて
2. 村にて
3. モスクにて
4. 酋長の行列

* * *

ベートーヴェン

交響曲第3番「英雄」

1. Allegro con brio
2. Adagio assai
3. Scherzo. Allegro vivace
4. Finale. Allegro molto

本日は、私共の第38回定期演奏会にごそお越し下さいました。

当団では、今年創団30周年の記念すべき年にあたり、今年3月の第37回と、今回の第38回の両定期演奏会を「記念定期演奏会シリーズ」と位置付けて取り組んで参りました。

この文を書くに当たって、当団の歴史を紐解いてみますと、当団は、1974年に結成され、翌1975年に第1回定期演奏会を開いております。この第1回定期演奏会に出演し、且つ今日の舞台にも乗っている方が3名おられます。(いずれも弦楽器男性で、75才 = 当団最年長、61才、57才です)30年もの永きに亘って団の発展に寄与して頂いたことに対し、感謝を申し上げます。

しかし、この3名の方以外にも、故人となられた方を含め幾多の(恐らく数百名の)元団員と現団員に支えられて、このオーケストラの「今日」があることを想うとき、揺籃期の困難な時代や、団員の減少から解散寸前に陥った苦しい時期を耐え忍んで頂いた先輩諸氏のご努力に対し、この機会に改めて深甚な敬意を表したいと存じます。

さて、本日指揮をして下さる藏野雅彦先生は、昨年9月の第36回定期演奏会にもご登場願ひ、大変情熱あふれるご指導により、団員の信頼も厚く、

演奏内容も素晴らしかったことから「また来年もお願いします」ということで、当団とは二度目のご縁となりました。

当団にとって今年の夏は、後述のように、「大層忙しい夏」であり「試練の夏」でもありましたが、その中にあっても私達のオーケストラ活動の根幹である「定期演奏会」のための練習には、最も重点を置かねばならないものと考え、真摯に練習を続けて参りました。

その点、藏野先生をはじめトレーナーの各先生方のご理解のもと、熱心なご指導を頂いた結果「記念定期演奏会」として恥ずかしくない演奏がご披露できるのではないかと自負しております。

別項で詳述されると思いますが、当団は今夏「全国アマチュアオーケストラフェスティバル」の開催ホストオーケストラとして、全団員が一致結束して夫々の任に当り、主催団体の(社)日本アマチュアオーケストラ連盟より未曾有のフェスティバルであったとの高い評価を頂戴することが出来ました。

これも、平素より私共のオーケストラ活動に深いご理解と、暖かいご声援を頂いている皆様方のお陰であると感謝いたしますとともに、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

チャイコフスキー：イタリア奇想曲

「イタリア奇想曲」はチャイコフスキーのレパートリー中、今日でも最も愛されている作品の一つといえます。

この曲の題にある「奇想曲(カプリッチョ)」とは、イタリア語で「形式にとらわれず気ままに」という意味から生じたもので、音楽形式上でも「愉快で気まぐれな小曲やそれらをつなぎ合わせたもの」という意味合いで使われています。

チャイコフスキーが結婚の破綻や創作上の悩み・病気など強度の神経衰弱のため療養をかねてイタリアへ旅した時にふれた、南国の明るく自由な空気が情景・思い出を、イタリアの民謡や舞曲のアレンジにのせて綴った曲がこの「イタリア奇想曲」です。曲は、5つの部分から構成されています。

第1部

ローマ滞在中、ホテルに隣接する騎兵隊兵舎から毎夕響いてきたといわれているファンファーレで始まります。それに続き、弦楽器が情熱的なカンツォーネを歌います。ファンファーレとカンツォーネが再度繰り返され、やがてオーボエによる素朴で明るいイタリア民謡「美しい娘さん」に由来すると伝えられる旋律が登場します。

第2部

4/4拍子の軽快なリズムに切り替わり、これに乗ってフルートと第1ヴァイオリン、続いてホルネットが陽気な導入旋律を奏でます。そのあとイタリアの明るい太陽と賑やかな街の様子を思わせるような第2部の主題。そして再び第1部の情熱的なカンツォーネが調を変えて再現されます。

第3部

急速なイタリア舞曲タランテラ。気付き難いですが「美しい娘さん」やカンツォーネ主題の変形も間に差し込まれています。このタランテラ舞曲は、踊っているうちにヒートアップするかのようになり、進行するにつれ情熱的かつ賑やかに演奏されます。(タランテラはきわめて速い3拍子系旋律で踊る活潑な雰囲気のある曲で、イタリア南部の有名な都市ナポリの舞曲です。ちなみにナポリは日本でたとえる大阪のように、独特の地方色豊かな活気があります。)

第4部

第3部の熱狂からブレーキをかけるようにテンポがゆるまり、イタリア民謡「美しい娘さん」を元にした旋律が全楽器で朗々と晴れやかに歌われます。

第5部

またもやテンポが速くなり、タランテラ主題を短調から長調に変えて目まぐるしく転調を繰り返し、さらにスピードアップして熱狂的な響きの中で曲が締めくくられます。チャイコフスキーが感じたであろうイタリアの陽光の明るさと暖かい安らぎを、演奏を通じてみなさまにも感じていただくことができましたら、甚だ幸いに存じます。

桑野祐子(ヴァイオリン)

イッポリトフ=イヴァノフ：コーカサスの風景

イッポリトフ=イヴァノフ(1859～1935)は19世紀～20世紀に活躍したロシアの作曲家。この曲は中央アジアの民謡を集め管弦楽曲に作曲したもので、素朴で親しみやすい曲となっています。

私がこの曲(第4曲「酋長の行列」)を初めて聴いたのは、小5の夏です。ブラスバンドでコンクールに出場したのですが、その演奏がラジオ放送されるとの事で自分たちの演奏を録音しながら、他校の演奏も聴いていました。どこかの学校がこの曲を演奏していたのですが、冒頭のピッコロとファゴットのユニゾンがあまりにも不思議なメロディと音色だったので、強く印象に残ってしまいました。私の小学校のブラスバンドにはファゴットなんて楽器はなく、聞いた事のない音だったので何度も何度も録音テープを巻き戻して聴いていた記憶があります。

今日の指揮の藏野先生も仰ってましたが、オーケストラでは、丁寧に綺麗に演奏するクセがついているのか、どうも整然とまとまった感じがしてしまう...、それじゃ、この曲はおもしろくない...と。私の勝手なイメージでは...この町はそんなに裕福な町じゃなく、町民が着てるものも立派ではなく、布切れを巻き付けた程度のもので、酋長もちょっと小太りの人の良さそうなオジさんで...。もしかしたら、ラジオで聴いた小学生の演奏がまだ印象強いのかも知れませんが...。恥ずかしながら、この「酋長の行列」の前に、とっても美しい3曲が付いていたなんて事実は最近知りました。どうやら滅多に演奏されてないようですから、今日のお客様はラッキーかも知れません!!これまた滅多に聴けないヴィオラのソロも聴けるんですよ。そして、この曲には「第2番」もあるそうです。興味がある方は滅多に売ってないですが、何とかCDを探して聴いてみて下さいね。

第1曲 峡谷にて

コーカサスのアラグヴァ峡谷を見下ろす峠。郵便馬車のホルンが谷にこだまする。ヴァイオリンとヴィオラによるテレーク河のせせらぎ、雄大な峡谷を描写した音楽である。

第2曲 村にて

峡谷の峠に住む男の淋しさと悲しさがイングリッシュホルンとヴィオラの掛け合いによって表現される。続いて、オーボエにより舞踏の主題が奏せられ、ふたたび冒頭の掛け合いで静かに終わる。舞踏の音楽にはグルジアの民謡が使われている。

第3曲 モスクにて

日没のモスク(イスラム教寺院)の尖塔から聞こえてくる祈りの音楽。管楽器とティンパニのみで演奏される。

第4曲 酋長の行列

ピッコロとファゴットの3オクターブのユニゾンで奏する印象的な旋律が、サルダール(酋長)の出発の様子を描写している。単独でも有名な楽曲である。

山科みどり(ファゴット)

ベートーヴェン：交響曲第三番「英雄」



この曲は1805年4月7日、ベートーヴェン(1770年12月16日生)が34歳の時にウィーンで公開初演されたそうです。第二交響曲から第三交響曲への飛躍は奇跡的で創作活力が漲っています。この曲の着想は31歳だった1802年10月6日と10日に、ハイリゲンシュタットで遺書を書いて間もない頃とされています。ベートーヴェンを苦しめた耳の病は、24歳の頃から始まり、治療しても良くなり、失恋問題もあったそうですが、前途を悲観したのでしょうか。音を失うという、音楽家には厳し過ぎる試練に敢然と立ち向かい、悲観していた自分を過去に葬り、蘇った自分は辛くても決して希望を失わず、楽しく明るく力強く生きる決意を、この曲は秘めているのではないのでしょうか。第一楽章では強く頼もしい英雄に憧れる気持を感じます。第二楽章では悲哀感の漂う旋律に包まれ、惜別の気持が募ります。第三楽章と第四楽章では楽しく躍動的な人生がイメージされます。47歳頃に補聴器が役立たなくなって筆談を余儀なくされ、以後の人生を無音の世界で過ごしたそうです。交響曲第九番初演の時は53歳、耳が不自由なためウムラウフと2人で異例の指揮をしましたが、楽員達はウムラウフの指揮に頼ったそうです。ベートーヴェンには演奏が全く聞こえなかったでしょう。画家が失明して手探りで描いた絵を自分では鑑賞出来ない状況と似ているのでしょうか。さぞ辛かったことでしょう。困り果てる問題が起きて挫けそうな時、ベートーヴェンの苦悩を想い浮かべて「英雄」を聴くと、勇気が湧いてくるのではないのでしょうか。

題名にまつわるエピソードがあります。当初はナポレオンに献呈する予定でした。1804年1月に完成した原稿の表紙に「Buonaparte Luigi van Beethorven」と書かれていたと門弟フェルディナンド・リースの著書「ピオグラフィッシュ・ノティツエン」に書いてあるそうです。(ナポレオンはイタリア出身で、イタリア語のフルネームはナポレオン・ブオナパルテです)しかし1804年5月18日にナポレオンが皇帝に即位したので、事態が一変しました。即位を知ったベートーヴェンが「己の野心を満足させるために民衆の人権を踏みじめる暴君」と烈火の如く怒り激しい筆圧のペン先で抹消したそうです。ベートーヴェンの期待を裏切ったナポレオンが、ヨーロッパ全土を戦乱に巻き込んだ挙句の果てに、セント・ヘレナ島で死ぬのは17年後です。その後も戦乱は治まらず、悲惨な戦争と決別する機運が盛り上がりヨーロッパ共同体が誕生するのは約200年後です。記念行事に交響曲第九番の歓喜の歌が登場しました。ベートーヴェンが生きていたら感極まったことでしょう。しかし「己の野心を満足させるために民衆の人権を踏みじめる暴君」は、未だに後を絶ちません。カづくでは問題は解決しないことを悟り、悲慘で、愚かで、不毛の戦争と決別する機運が世界中で盛り上がるのはいつ頃になるのでしょうか。敬愛する

天国のベートーヴェンさま、諦めずに待つことにしましょう。

第一楽章 アレグロ・コン・プリオ、変ホ長調、3/4拍子、ソナタ形式。主和音が2回奏されてから、英雄の名を不朽にした雄大な第一主題をチェロが奏でて始まり、木管が下降する美しい経過部を経て律動的な第二主題が提示されます。続けざまに不協和音を叩きつけた後、従来の習慣を破る、長大な展開部が始まり、提示部の動機が徹底的に展開され、新しく短調の旋律も現れます。躍動的な旋律が次々に登場して高揚した後、再現部に移ります。最後に素晴らしい長大なコーダに移って、最高に盛り上がり終わります。

第二楽章 葬送行進曲。アダージョ・アッサイ、八短調、2/4拍子。複合3部形式にソナタ形式を結合しています。涙が滲み出る、美しい第一主題をヴァイオリンが奏でて始まり、オーボエが引継いで、弦楽合奏が第二主題を奏で、2つの主題を繰り返した後に「マジョーレ(より大きい)」と記されている中間部に移り、嵐のようなティンパニで盛り上がり展開部に入り、行進曲のテーマを再現してフーガに移ります。楽しかった思い出が走馬灯のように巡り、深みのある感動的な旋律が次々と展開して再現部に移ります。悲哀感の漂う旋律が現れる楽章終結部に移りうち沈むように終ります。

第三楽章 スケルツォ。アレグロ・ヴィヴァーチェ、変ホ長調、3/4拍子。複合3部形式。リズムカルなざわめきから始まり、速いテンポで演奏される、明るく躍動的な曲です。中間部でホルンが牧歌的で素敵三重奏を奏でます。再現部に入ってリズムカルなざわめきに戻り、しばらくすると即興的な2拍子が現れ、興奮が次第に盛り上がり終わります。

第四楽章 フィナーレ。アレグロ・モルト、変ホ長調、2/4拍子。変奏曲形式ですがフーガの手法とソナタの特徴が織り込まれています。速いテンポで導入部を奏してから、「プロメテウスの創造物」の終曲で使った旋律が主題として現れます。思わず踊り出したくなる楽しく躍動感が溢れる自由奔放な演奏が続けられます。興奮が最高潮に達した後、プレストによる短いコーダが現れ、内容が充実した、感動的な大曲の演奏を締めくくります。

川端成彬(ヴァイオリン)

藏野 KURANO

MASAHIKO 指揮 雅彦



1956年京都市に生まれる。京都市立堀川高校音楽科(現市立音楽高校)を経て1979年東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。トランペット、指揮を学ぶ。1992年ウクライナ・ナショナル交響楽団のキエフ市における定期演奏会で、マーラー交響曲第1番「巨人」、プロコフィエフ「ロメオとジュリエット」等を指揮し大成功を収めプロデビューする。2002年文化庁派遣芸術家在外研修員としてオーストリア国立グラーツ芸術大学大学院指揮科に留学、マルティン・ジークハルト教授に師事。またグラーツ州立歌劇場でも研鑽を積む。01年同志社交響楽団を率いての欧州公演でミュンヘン、グラーツにおけるマーラー交響曲第1番「巨人」等の演奏で大成功を収め、同年京都市交響楽団との共演による京響市民合唱団公演でラター「マニフィカト」を指揮し好評を得た。大文字国際交流音楽祭には4年連続して出演「答えのない質問」等本邦初演を含むアイヴズ作品を指揮。さらに02年から03年には、大蔵流狂

言、若林暢(ヴァイオリン)、都響、神奈フィル、仙台フィル、大フィル、京響のメンバーとの共演でストラヴィンスキー「京風」「兵士の物語」を京都、東京、奈良の3都市で指揮し大きな話題を呼んだ。また04年には八幡文化センター創立20周年記念市民音楽祭音楽監督としてマーラー交響曲第2番「復活」を指揮し大成功をおさめる。現在までにロシア国立ノヴォシビルスク・アカデミー交響楽団、ロシア・マリエル国立歌劇場、キエフ・シェフチェンコ国立歌劇場管弦楽団、京都市交響楽団、大阪市音楽団をはじめとし、多くのオーケストラを指揮し好評を博す。海外公演にはヴェルディ「椿姫」、プッチーニ「蝶々夫人」のオペラ指揮も含まれ、いずれも大成功を収めている。第13回京都芸術祭府知事賞受賞。指揮を小泉和裕、田中良和、伊吹新一、故遠藤雅古の各氏に師事。現在、京都市立音楽高等学校音楽科主任、京都教育大学教育学部、同大学院非常勤講師として後進の指導にもあたっている。

第3回 関西シティフィルハーモニー交響楽団
ファミリーコンサート

《世界音楽めぐり》

2004年11月28日[日] 池田市文化会館 アゼリアホール

指揮 高昌帥
曲目 サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン
ガーシュイン：ラブソディ・イン・ブルー
高昌帥：コリアン・ダンス(管弦楽のための)：初演 他
...詳しくはこのプログラムに挟み込んである案内チラシをご覧ください...

関西シティフィルハーモニー交響楽団 第39回定期演奏会

2005年3月21日[月・祝] ザ・シンフォニーホール

指揮 ギオルギ・バブアゼ
曲目 ベルリオーズ：ローマの謝肉祭 序曲
デュカス：魔法使いの弟子
フランク：交響曲二短調

関西シティフィルハーモニー交響楽団友の会
会員募集のお知らせ

当団では「友の会」の会員を募集致しております。
会員になられますと 当団主催演奏会のご案内 特別優待価格でのご案内
友の会特別席のご用意等の特典があります。入会金、会費無料!!
お問い合わせは事務局までお気軽にどうぞ[松田 斉 0729-58-4585]

団員募集の
お知らせ

打楽器パート 急募

練習日時 毎週土曜日、夜6:30~9:30
練習場所 北出音楽事務所(JR・京阪 京橋駅 から徒歩10分)
お問い合わせは事務局まで。[0729-58-4585]
なお、当団のホームページでも最新の団員募集情報を公開しております。

関西シティフィルハーモニー交響楽団

VIOLIN

西田 美音子
飯田 裕美
稲谷 亜季子
岩井 哲也
上阪 美保子
岡 雅樹
岡崎 鈴代
小野寺 慶太
加藤 孝司
加藤 裕紀子
川井 裕史
河盛 晶子
神田 靖子
北村 栄祥
桑野 祐子
斎藤 良子
佐川 眞佐子
佐向 恵子
隅谷 恭子
高橋 浩二
谷所 幸子
中川 雅登
中谷 日出夫
中谷 道代
難波 千里
西川 友理子
西村 悠美
橋本 敏彦
花村 美佳
廣瀬 知華
藤田 恵子
森川 裕
山本 真弓
吉岡 弓子
和久 景子

VIOLA

秋山 久雄
井戸 義訓
入江 隆
浦中 美智子
太田 真紀子
岡 恵子
川端 成彬
田中 景子
豊島 直子
戸井田 隼
坂東 佑二郎
福田 文治
松本 光世
宮崎 友彰

VIOLINCELLO

阿保 幸雄
岩田 倫和
奥野 平人
片山 直久
国芳 真紀子
坂元 正三
豊島 正
富樫 誠
中村 郁
橋本 美代
廣瀬 恵子
藤井 綾

DOUBLE BASS

稲葉 杏子
岡田 志穂
隅谷 正一
高橋 はるか
長岡 豊
萩尾 善正
福田 香絵
安近 紀子
渡辺 昭一

FLUTE

芝野 均
丹波 博子
多田 博史
渡辺 和雄
川端 裕美 (客演)

OBOE

岡田 啓
酒井 洋
高谷 利枝
波留 ひとみ

CLARINET

栗山 明子
芝野 範子
細野 巖
山中 聡子

BASSOON

市川 里美
一ノ瀬 圭子
上川畑 良子
山科 みどり

HORN

安彦 高志
織田 克洋
橘 逸平
中谷 星子
西山 順子
廣橋 麻理子
山科 幸生

TRUMPET

残熊 祐治
西川 倫史
廣橋 誠司
森 修二
山田 浩之

TROMBONE

柏岡 亨
金 昌信
松田 斉

TUBA

藤川 健

PERCUSSION

川人 玲子
田村 千春
富岡 計次 (客演)
丸川 由香 (客演)
上柿 泰平 (団友)
守 葉子 (団友)

HARP

鈴木 貴子

団長 松田 斉
副団長 柏岡 亨
運営委員長 山科 幸生
チーフパトリージャー 阿保 幸雄
総務 坂元 正三
富樫 誠
インスペクター 廣橋 誠司
会計 岡 雅樹
国芳 真紀子
田村 千春
団費 一ノ瀬 圭子
一ノ瀬 圭子
佐向 恵子
人事 入江 隆
広報 岩田 倫和
上川畑 良子
細野 巖
ライブラリアン 井戸 義訓
エキストラ 桑野 祐子
楽器 金 昌信
友の会 加藤 裕紀子
渉外 森 修二
山本 真弓
会計監査 長岡 豊

...コンサートミストレス
コンサートマスター

...パトリージャー

トレーナー 池田 重一 | 谷野 里香
市野 桂子 | 中谷 葉子
岩井 英樹 | 林口 眞也
高 昌 藤井 眞帆

第32回

JAOフェスティバルコンサート

in大阪

を終えて



去る8月20日から3日間、「第32回全国アマチュアオーケストラフェスティバル大阪大会」が大阪国際会議場を舞台に開催されました【主催：(社)日本アマチュアオーケストラ連盟(JAO)他】。関西シティフィルは実行委員会の主管ホスト団体として、大会の準備・運営にあたりました。最終日のフェスティバルコンサートでは、大阪市の大平光代助役よりユーモア溢れる歓迎の舞台挨拶を頂戴し、また大阪府の太田房江知事が、府民を代表して歓迎のピアノ協奏曲を演奏下さいました。会場は大阪市・大阪府の障害者施設からお招きした200名の皆様を含め、2700席余りの客席が満席となる大盛況となりました。

【第32回 JAOフェスティバルコンサート in 大阪】 8月22日14:00 大阪国際会議場メインホール

スメタナ：連作交響詩「わが祖国」から「モルダウ」(水の都大阪にちなんで)

モーツァルト：ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」より第1楽章

ピアノソロ 太田房江(大阪府知事)

指揮 西本智実 ゲストコンサートミストレス 赤松由夏

演奏 JAO大阪フェスティバルオーケストラ(120名)

シベリウス：交響曲第2番 二長調

指揮 栗田博文 ゲストコンサートマスター 稲庭 達

演奏 フェスティバルオーケストラA(114名)

チャイコフスキー：弦楽セレナード 八長調

指揮 森悠子

演奏 フェスティバルオーケストラM(72名)

ムソルグスキー(ラヴェル編曲)：組曲「展覧会の絵」

指揮 西本智実 ゲストコンサートミストレス 赤松由夏

演奏 フェスティバルオーケストラB(149名)

“演奏する喜び、聴く喜び、支援する喜び、歓迎する喜び - 4つの喜びが最大の「有意義な3日間」を目指して3年前から準備してきた大会がいよいよ開幕! 大会初日、午後1時の開会式に全国から5000人ものアマチュアオーケストラメンバーが勢揃い(ドイツアマチュアオーケストラ連盟からも5名が参加)。午後2時早速練習開始。それぞれの指揮者がお得意の名曲で指導には自ずと力が入り、情熱一杯の奏者によって音楽がみるみる仕上がってゆきました。初顔合わせの合同演奏に欠かせない懇親会は、大阪らしさが満喫できる道頓堀で、練習後バス6台に分乗しがんこ寿司さん(4店舗貸切)に直行。夜が更ける頃、道頓堀のあちこちで大会土産の「特製うちわ」が揺れていました。

大会二日目も朝から練習。夜は全員でレセプション。太田知事による乾杯のご挨拶は、「私はしゃべくりが本職よ!」と面白おかしく大いに盛り上がり、参加者全員の意気が最高潮に達しました。

大会三日目はいよいよ本番。満員のお客様を前に西本智実さんが颯爽と登場、流麗なモルダウで幕開け。演奏は関西シティフィルの他、大阪市民管弦楽団、交野シティ・フィルハーモニック、近畿フィルハーモニー管弦楽団、堺フルハーモニー交響楽団、吹田市交響楽団の、同じホストとして準備の苦楽を共にしたオーケストラの皆さんとの合同演奏でした。続く太田知事のピアノはなんと軽快で活き活きとした素晴らしいモーツァルトだった事でしょう!そして、栗田博文さんの指揮による精巧で感動的なシベリウス、森悠子さんの指導による大編成弦楽アンサンブルの奇跡的な豊かな響き。最後の締めくくりは大迫力で渾身の「展覧会の絵」...客席からはそれぞれブラヴオーと大拍手の連続でした。打ち上げでは、参加者の満足そうな笑顔が溢れ返り、みな割れんばかりの歓声の渦に司会者の声はほとんど聞き取れませんでした。「音楽をやっている良かった」その喜びを全員でかみしめた瞬間でした...

り御礼申し上げます。本当にありがとうございました。またご来聴頂きました皆様には、演奏会進行が長引く、空調の調整に手間取るなどの不手際がございました事を、謹んでお詫び申し上げます。

(大会事務局長 森修二)



レセプション会場の舞台では、即席ユニットによるアンサンブル大会が。写真にはパーカッションパートによる「ハンド&ボイスパーカッションアンサンブル」。



末筆になりましたが、このような大会を無事、盛大に終えられましたのは、各方面でご支援頂きました皆様、ご来聴頂きました皆様、演奏にご参加頂きました皆様、ホストとして精一杯の準備と歓迎を下された皆様など、関係各位のご理解とご協力の賜物だと心よ

「オーケストラM」の練習風景。座の向きが変わっていますが、指揮を見るのではなく、お互いを聴き合うことで極上のアンサンブルが生まれました。

